
悪魔に支払う奇跡の代価

楓猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔に支払う奇跡の代価

【Nコード】

N0120Y

【作者名】

楓猫

【あらすじ】

自らの冒険を終え、隠居生活をおくる主人公。家事好きの悪魔とのんびり暮らしていたのだが・・・
終わったはずの物語が動き出す。鈍感でズボラ、でも意外とハイスペックな男装主人公と家事に魅せられた美形悪魔がおくる、笑いあり涙あり？な物語。

始まりの終わりとその後の日常

奇跡を起こすためには代償が必要だ。

物事には始まりがあれば終わりがある。

たとえその結末が、望まぬものであったとしても。

「どうするんだ？」

聞きなれた声がして、自分が呆然としていたことに気づく。思っていた以上に自分はショックを受けているらしかった。

床には痩せた男が血まみれで倒れている。

先ほど自分が殺した相手だ。憎んでも憎みきれない相手。

剣で一突き。それであっさりと死んでしまった。いっそ拍子抜けしたと言ってもいい。虚しささえ感じられない。

男が死ぬ前に並べた、命乞いでさえない言い訳の羅列。

それは所謂『真実』というやつを多分に含んでいた。ようやくわかった事の真相は、容赦なく残酷すぎる現実をつきつけてくる。

黒幕を倒して、それですべてが解決すれば、どんなに良かっただろう。

願いを叶えるために必要な力をつけた。知りたかった真実もわかった。

けれど本当に望んだ結果だけは手に入らない。

「どうしようもないさ」

一応、選択肢は存在している。けれど、選べないのだから仕方ない。

それほど長い付き合いではないが、目の前の悪魔にはそのくらいお見通しだろう。

悪魔は恐ろしく美しい姿をしている。

輝く金の髪に透き通る緑の瞳。顔だけ見れば天使のようだが、背中にあるのはまぎれもない、悪魔の証たる漆黒の翼だ。

強大な魔力を持ち、契約相手に絶大な力を与える。これほど早く真実にたどり着いたのには、この悪魔の働きによるところが大きい。

しかし、悪魔との契約には代価が付き物だ。目的と引き換えにするもの無くば、契約は成り立たない。

そして、直接尋ねてみたことは無いが、おそらく自分が契約した相手は悪魔の中でも相当上位な存在だろう。

いったい何が要求されるのか。実のところ、いつもはぐらかされ

てばかりで、明確な答えを聞いたことは無かった。

「けりはついたから、おまえとの契約は一応完了ってことになるのかな」

そう言って、浮遊している悪魔を見上げたが、悪魔は何を考えているのか良く分からない表情をしていた。

策謀をめぐらすことは多くても喜怒哀楽ははっきり見せてくる相手だったので、こつこつのはひどく珍しい。らしくなく遠慮でもしているのか。

「好きなもの、取っていつていいよ。あゝ魂が好物なんだっけ？」

確かそのような記述をどこかの本で読んだ気がする。なんでも絶望に染まった魂を好むとか。

今の自分の状態が絶望というやつなのかは知らないが、これ以上に望みもないので、今までの働きへの報酬として喰われてやってほしいという気分になっていた。

「・・・本当に、もう望みは無いんだな」

「ああ」

あ、でもできれば痛くしないでほしいなあ、とは思つ。痛みには強い性質だが、だからといって好き好んでいたぶられたくない。

「優しくしてね」

などと茶目つけ混じりに言えば、悪魔は苦笑した。

こつこつという表情は人間ぽい。

「ああ、優しくしてやるさ。大事なご主人様だからな」

そう言って、悪魔は翼を広げた。

視界が黒く染まる。

そうして何もわからなくなった・・・

冒険に出る者というのは、何かしら追い求めるものがある。それは大抵財宝だったり、力であったり、真実だったりするのだろう。そうして得られたものが本当に自分にとって必要なものであったのかは、旅を終えてみなければわからない。

そしてそれをどう使うかは、得た本人次第だ。

その点、自分は有効に活用できている、とキラは自負している。

キラもかつては冒険者と呼ばれる者だった。幾多の困難を乗り越

え、失ったものもあつたが、旅を通して得たものは大きい。
たとえば……

「キラ。掃除の邪魔だ。そこをどけ」

目の前にいる俗に超絶美形と呼ばれ、外にでたら女子にキヤーキヤー言われそうな男。間違いなく、彼こそ一番の収穫だったに違いない。

容姿のみならずあらゆる家事に優れた、まさに一家に一人はほしい理想の人物。

いや、正確には“人”物ではないが……

「おいキラ」

「うるさいなあ。わかったよ。どけばいいんだろう、ルウ」

なかなか動こうとしないキラに業を煮やして、ルウの声に凄味が増す。それを聞いてようやくキラは立ち上がった。

いかにも渋々といった感じであったが、下手にルウの機嫌を損ねると今日の食事が恐ろしいことになるのだ。

が、自他共に認める面倒臭がりのキラだ。すぐに大して離れていないソファールにごろりと横になった。しかしルウの方も慣れたもので、とりあえず床を綺麗にしようとそのまま掃除を続ける。

悪魔つて以外と家庭的なのだなあ、とソファールで半分寝ぼけながらキラは思った。

てつきり魂を取られるものだと思っていたのだが、気づいたら3食昼寝付きな生活が待っていた。

しかもどうやら家事の魅力に嵌ったらしく、炊事洗濯はすべての悪魔がこなしている。

特に料理が得意で、新作料理を作っているときなどは非常に楽しそうだ。おかげですっかり舌が肥えてしまっていて困る。

どんな思惑があつてのことなのか、あるいは単なる暇つぶしなのか。キラにはよくわからない。けれど、

(こんなのが悪魔の望んだ代価なら、悪くない)

本格的に眠気が襲ってきた。

起きた時には、部屋もきれいに片付き、悪魔が作ったおいしい料理が食卓に並んでいることだろう。

夕飯はシチューだといいなあと思いながらキラは目を閉じた。

代価は悪魔と過ごす幸福な日常。

始まりの終わりとその後の日常（後書き）

突然降ってきたネタです。

こんな感じなのがベースになります。

設定はたぶんシリアスですが、いかせるかどうか…

ちなみにわかりにくいでしょうが主人公は一応女です。

キラは悩んでいた。

目の前に落ちているものをどうするかについて。

見たところ手足は二本ずつ付いているし、頭も潰れていない。僅かに胸が上下に動いているので、生きてはいるらしい。

ただし、その腹部には長大な剣が突き刺さっているが。

生きているのは目の前の存在だけのようだった。辺り一面血の海というやつで、いくつか死体が転がっているが、キラは軽く一瞥しただけですぐに視線を戻した。

見ず知らずの赤の他人の為に墓を作ってやろうとか、弔ってやろうなどという気にはならない。放っておけば獣たちに食われて自然と土に還るだろう。

問題は死人ではなく、生きている方だ。

血塗れではあるが、身分の高そうな服を身に着けた、端正な顔立ちの男。おそらく貴族出身の騎士というところだろう。

関わると面倒なことになるに違いない、とキラの勘が告げている。

だが、このまま放っておけば確実に死ぬだろう。剣によってもたらされたのは致命傷ではないが、出血量が多すぎるのだ。

キラは面倒なことが嫌いだ。だが、人並みに良心や罪悪感とか言われるものを持っているのである。そして皮肉なことに、自分が助

けられるだけの能力を有していることを知っていた。
諦めたように溜め息を吐いた。

「怒るかな」

ぼそりと呟いた言葉は、家にいる相棒に対してだ。今現在は家に調理中のはずだ。

そもそもキラの外出の目的は、山で鳥かウサギを捕まえて夕食に使う肉を調達することだったのだ。

代わりにこんなものを持って帰ったら何を言われるだろう。

面倒を増やしたと怒るか、食べられないものを取ってきたことに呆れるか。

「あ、悪魔って人肉も食べるのか？」

目を輝かせて調理し始めたらどうしようか。

さすがにそんな料理は遠慮したいなあとキラは思った。

目の前の死体もどきを持ち帰ることは、決定済みだった。

「馬鹿か」

開口一番に馬鹿にされた。わかつてはいたが、人間扱されれば傷つ

く。

「しかも獲物なしだと？こんな食えもしないものだけ拾ってきやがって」

（あ、食べないんだ…）

ちょっと安心したような、がっかりしたような微妙な気持ちになるキラであった。

キラが連れ帰った男は一通り治療され、今はベッドで寝ている。出血量が多かったため顔に血の気はないが、絶望的な状態からは脱していた。あと数日は経過を診なければならぬが、若く体力のありそうな男なのでなんとかなるだろう。

しばらくすると台所の方からいい匂いがしてきた。間抜けに鳴いた腹の虫によって、自分が空腹であることに気づく。

どうやらルウは戦利品抜きでもうまい料理を作ってくれたらしい。さすが悪魔だ、とキラは微妙に感心する。

キラはさらに感心した。匂いにつられたのか、男が目を開けたのだ。

「じ、こじは…」

男の目は見慣れぬ天井を虚ろにさまよい、しばらくしてキラの顔で焦点を結んだ。

見知らぬ存在を警戒したのだろう。男は一瞬体をこわばらせ、無意識に腰に手を伸ばした。彼の持っていた剣など治療の邪魔にしか

ならないのでとうに取り除いていたのだが、そのことが男にいつそう不信感を抱かせたらしい。射殺するような鋭い視線をキラにむけ、隙なく身構える…はずだった。

「!?」

あれだけの重傷だったのだから、当たり前だが動けば痛い。男は痛みで悶絶した。涙までながしそうな勢いだ。

(アホらし…)

苦しむ男を視界の端に入れながら、キラは呆れて溜め息をついた。どうやら男には自分の体の状態が理解できていなかったらしい。

「全身打撲の上切り傷だらけ。肋骨四本が骨折して一本は肺に突き刺さってた。右手と両足の腱は切れてたし、左足は毒で壊死寸前。腹部に刺さった剣は貫通。けど、致命的な臓器や神経の損傷はなかったし、一番太い血管は無事だった。不幸中の幸いだな。だから助かったんだ」

そんな体で平気な顔して動き回れる奴などいない。鎮痛剤を使うにしても限界がある。

「大体あんたを殺すぐらいわけなかったよ。見ない振りして立ち去ればよかったんだから。それをわざわざ連れて帰って手当までして恨まれる謂われなんて一つもないんだけど」

怪我人相手でもキラは容赦しない。冷たい視線で軽く相手を見据え、小馬鹿にしたようにふっと笑った。

さて、どんな反応が帰ってくるだろう。あまりにも恩知らずな発

言をしたら蹴りの一つも入れてやる、と意地悪く考えていたキラの思考を遮ったのは静かな声だった。

「すまない。命の恩人に対して無礼な態度をとった。助けてくれたこと、礼を言う」

先ほどまでとは打って変わって物静かな雰囲気を称えた、まさに騎士と呼べる人物がそこにいた。おそらく、普段の男はこういう人格なのだろう。

「わかればいいさ」

キラとてそれほど気にしていない。怪我をして気が立つのは人も獣も同じだ。

先ほどとは異なる柔らかな笑みを見せたキラに安心したのか、男も表情を緩めた。

「私はセージユ国白炎騎士団第3部隊隊長クロード・ラドナだ」

「俺はキラ。よろしく隊長さん」

場が和やかになったところで、低く唸るような音が響いた。

そつえば、男が目を覚ましたきっかけは…

「とりあえず、飯にするか」

顔を赤らめた男の肩を軽く叩き、キラはまた笑った。

気の利く悪魔によって作られた、かなり美味しい病人食を一通り食べ終えて、クロードは満足そうに息を吐き出した。

「こんなに美味しい食事が食べられるなんて思いませんでした」

聞きよつによつては失礼な発言だが、悪気はないのだろう。それほど山奥に住んでいるのだから、そう思つのも無理からぬことだ。

クロードは純粹にルウの料理の腕を賞賛していた。

「それはどうも」

それがわかつているので、ルウも軽く笑みを返した。誉められたら悪い気はしない。それは悪魔にとつても同じなのである。

ルウの笑顔にクロードは目が釘付けになった。

彼自身も今までその美しい容姿を賞賛され続けてきた立場だが、ルウは別格だった。ふとした所作でさえ、万民の目を引きつける。

その笑顔を向けてもらうためなら、全財産を差し出しても構わない、という者さえざらだろう。

まさに傾国というに相應しい。

ぼつつとルウに見とれるクロードと、分かっているやっついであるつルウを見やり、キラは

(あーあ、またやってるよ)

と冷静に状況を考えていた。

この悪魔との付き合いもそこそこ長くなってきたキラが、今更笑顔ごときで動揺するはずもない。

一緒に旅をしているときも、有力者を誑かして便宜をはからせたり、情報を聞き出したりと有効活用されていた。

本性を知っているキラからすればいつそ寒気がするぐらいだが、初対面の相手は悉く引つかかる。知らないというのは幸せなことだ。

ルウがそういう行動をとるということは、何か意図があるということだ。おそらくクロードの情報や目的を聞き出そうとしているのだろう。

怪我人相手に少々酷かもしれない。ルウはキラに対して遠慮しないが、他に対しては容赦をしないのだ。

まあ、笑顔であるだけましであろう。美形を怒らせると凄みがありすぎる。

「ルウ殿たちはなぜこのような山奥に住んでおられるのですか？いろいろと不便でしょうに…」

「人が多いところは苦手だね。以前はいろいろなところを転々とし

ていたが、誰にも煩わされずに過ごせるところが気に入ってね。以来ここに住んでいるんだ。不自由なこともあるが、住めば都さ」

ものは言いようである。決して嘘ではないが詳しい事情は話さない。相手はルウの見た目も相まって、きつと以前に人間関係での問題（おもに痴情のもつれ）があつたに違いない、と勝手に思い込んで深く突っ込んできたりしない。まったくもって美形とやらは得である。

「ところで、クロードさん。あんたこそこんな山奥に一人でどうしたんだ？キラの話じゃ相当深い怪我だったようだし」

いや、話したくなければ別にいいんだ。元気になるまでここでゆっくりするといひ。

すかさず笑顔で付け加えるところは悪魔的だ。悪意なぞ少しもないと見せかけた顔は、輝くばかりに美しい。

短い時間の中でも、この騎士殿の誠実さが伝わってきた。だから、そう言われれば、クロードは恩人に対して事情を話さなければ誠意を見せたことにならない、と認識するに違いない。

案の定少しだけ苦笑いしたあと、話を切り出した。

「実は私はとある任務の為にこの地に赴いたのです。」

しかし、これは極秘の任務です。どうか他言無用に…

などと言い出すので、キラは、おいおい、極秘任務の内容を赤の他人に話してもいいのかよと心の中で突っこんだ。同時に何か嫌な予感がした。

「我が王国の第2王子ユリウス様は高い癒しの能力があり、どんな難病でもたちどころに治してしまうほどの力をお持ちです」

「尊には聞いている。“奇跡の御子”と呼ばれているとか…」

そう答えながら、ユリウス、という名を聞いた途端、キラは心がすっと冷えるのを感じていた。おそらくはルウも同じような心持ちだろう。本当のところ、知っているどころではない。

そんな二人の変化には気づかず、クロードは話を続ける。

「はい。ご気性も穏やかで、兄君である第1王子との仲もよく、我ら騎士を始め、民にも広く慕われたお方です。しかし、ある時、殿下は原因不明の病に倒れられてしまったのです」

癒しの能力はかなり難しい怪我や病気でも治してしまうが、その能力の持ち主が自らに使用することはできない。他人の怪我は治せても、自分の怪我は治せないのだ。

そのことをキラは誰よりもよく知っていた。かつてはキラも、同じ能力を持っていたのだから。

「王室付きの医師を始め、市井で評判の医師、薬師、祈祷師、占術師に至るまで、ありとあらゆる方面の人材を集め、治療に奔走したものの、結局殿下の容体は回復しませんでした。むしろ日に日に悪くなっていくばかりで…。そんなとき、とある噂を耳にしたのです」

寒さ厳しく、凶暴な獣がうろつくことで有名なレギナ山。その山深くに腕のいい医者が住んでいるというのだ。

「……」

話の流れがわかった。このあとの展開も容易に予想できる。すでにキラの顔は引きつっていた。

「私はその噂に一縷の望みをかけました。部隊の派遣を申請し許可をとるには、根拠が噂だけでは時間がかかります。私はそれを待てませんでした。時間が過ぎれば過ぎるほど、殿下は死へと近づかれる。一人で出発した私に、レギナ山の獣たちと、暗殺者たちが待ち受けていました。暗殺者の狙いが殿下の回復を阻止することだったのか、それとも私自身が狙いだっただのかはわかりません。しかし、私は命の危機に瀕していました。正直もう駄目だと諦めてさえいたのです。だが、神は私を、殿下を見捨ててはいなかった！」

クロードは興奮が頂点に達し、けが人とは思えないスピードと力でキラの両手を握った。一時的に痛みさえも忘れていたようだった。

「キラ殿！死にかけていた私をこれほどまでに回復させる技をお持ちのあなたこそっ、私が探していた、殿下を御救いできる唯一の希望であるに違いない！どうか王都へ来て殿下の病を癒してください！！！」

「どうか王都へ来て殿下の病を癒して下さい！」

クロードの声が響き終わると、少しの間部屋に沈黙が広がる。動いたのはキラだった。大きなため息をつく。

「正直に言おう。気が乗らない」

「へっ!?!」

断られることなど考えもしなかった、という反応だ。

「なぜ、とお聞きしても?」

困惑を滲ませた声でクロードは尋ねた。

普通ならこの話を素直に受けるだろう。自分が王子を治せばそれでよし。王室のおぼえめでたく、報償もはずんでもらえるだろう。失敗したところで、ああまた駄目だったか、と特に咎められることもあるまい。

普通の医者ならば、だ。

生憎良くも悪くもキラは普通ではない。

「俺はセージユ王家っていうものを信用してない。そのお膝元の王都やらお城なんて真っ平御免だ」

セージユ王家、特にユリウス王子とは浅からぬ縁があった。それ

も決して友好的ではない代物だ。

だが一方で、自分を頼ってきた病人を見捨てることには抵抗があった。患者を拒まない、というのがキラの昔からの信条だ。

はつきり言ってしまうえば、嫌いな相手を治療したくはないが、それは医者として倫理的に問題だ、ということだ。

本当のところユリウスという少年がどのような人物であるのか、直接会って確かめたことはない。

しかしかつて彼に大切なものを奪われたキラとしては、彼に何も含むところがないと言い切れない。

例えば彼自身の意思でなかったとしても、すべては彼の為に起こったと言っても過言ではないのから…

「…どんな事情があるかはわかりませんが、我々にはもはやあなたの他に縋れる人はいません。それに、王都にいる間のことはすべて私が保証しましょう。何一つ不自由のない生活をお約束します。治療以外の時間は自由にして下さってかまいませんし、もちろん十分な見返りも差し上げます」

ですからどうか…とクロードは懇願した。痛みがあるだろうに、深々と頭を下げる。クロードにしてみれば藁にも縋る思いであったろう。

「少し考えさせてくれないか？」

怪我人相手に頭を下げられれば、キラとて無視はできない。まして自分が治療した患者なのだから。

「今日はもう遅い。怪我人はとりあえずよく寝て傷を癒やすことだけに倣う。それだけ告げると、キラは部屋を出て行った。ルウも黙ってそれに倣う。」

再び沈黙が満ちた部屋で、クロードは息をはいた。呼吸するときでさえ、痛みが体に突き刺さる。

本当に死にかけたのだ。運良く助かった命を無駄にはすまい。必ずや、彼を王都に連れて行ってみせる！

クロードの目には決意の炎が燃えていた。そのためにまず必要なのは休息だ。早く休んで体力を取り戻さなければ！

そう思い早々に眠りに就いた。騎士団の遠征や訓練でどこでも寝られるのが彼の特技の一つであった。

クロードは優秀で根がまじめであったが、少々単純なところがあつた。

ついでにいうならいささかならず鈍かつた。

自分の命の恩人兼主君の恩人（予定）に関して、かなり重要な認識を誤っていることになど、まったく気づいていなかったのである。

「どうするつもりだ」

クロードの寝ている部屋を後にしたキラとルウは台所まで戻ってきていた。

ルウはお茶を入れ、ミルクティーにしてキラに渡してやった。

「…あつたかい」

ルウの問いには答えず、キラはミルクティーをすすった。甘さが体にしみる。こんなときまでキラの好みを知り尽くしているのだ、この悪魔は。

「おまえのことだ。もう結論は出ているんだろう」

「まあね」

そしてその思考も理解している。

「ルウ、許してくれるか？」

かつて結んだ契約で、キラは自らのすべてをルウに委ねた。今の生活は悪魔が望んだものであって、キラにはもはやこの悪魔を縛る権限はない。

ルウが許さなければ、本来キラは指一本さえも動かすことができないのだ。

「おまえが俺に対していちいち許可を求める必要なんてない」

そう言つてルウは右手でキラの左側の頬を撫でた。

「しかもユリウスとかいうガキに関わる内容なら、契約の延長ともとれる。それなら、主人はおまえだ。俺に変にはばかることなく、好きに動けばいい」

ルウの言葉は甘い。

ミルクティーのような安堵感を与えるものではない。毒のように体を、精神を侵していく。

初めて出会ったところと何ら変わらない。

いや、むしろ今のほうがひどくなったとキラは感じた。悪魔の差し出す蜜を享受し、どっぷりと浸りきってしまった後なのだから。

「おまえの望みはすべて俺がかなえてやる」

だからその時がきたら、俺の『名』を呼べ。

そう耳元で囁かれれば、体が震える。

絶対にルウはわかかっていてやっている。

契約時に告げられたルウの本来の『名』
それこそが悪魔を縛り、契約者を捕える鎖。

絶望と快楽でできたその名を、近い将来また口にする日が来る。
それは予想ではなく確信としてキラの中に存在している。

「しかし、よく行く気になったな」

あきれたような口調でルウが言った。そういう顔をしていれば人間らしいのだが…とキラは内心苦笑した。

「見てみたいと思ったんだ」

クラウドがあそこまで入れ込む、ユリウスという王子を。

「彼は本当にユリウスを慕っているんだろう。でなければ一人で王都を飛び出したり、獣の多い山に入ったりするものか。騎士団の一部隊を任せられている男に、そこまでさせるなんて…一体どんな人物なのか、直接会って確かめてみようと思ったんだ」

そう言っただけでキラはいつそ鮮やかに笑う。そこには恨みや憎しみは感じられない。ただ純粹で無邪気な好奇心だけがある。

だからこそ、とルウは思う。

そうであればこそ、おもしろい。

長く生きた悪魔の無聊を慰めることができるものは、そう多くない。

気まぐれでもキラのそばにいたのは、キラがルウを退屈させない魂の持主であったからだ。

純粹だが悲しみも怒りも知る、成熟した魂。

その魂に爪をたてたらどんなに甘い血が流れるだろうと思いがながら、触れて壊してしまうことを惜しくも思う。

矛盾する気持ちを抱えながら、けれどそんな自分の状況にさえ笑みがこぼれた。

悪魔に魅入られながら、その悪魔によって惜しまれる。故に『彼女』は悪魔の主たるにふさわしい。

「ルウ」

まるで思考を遮るかのような絶妙なタイミングでキラの声が響いた。

差し出されたのは空になったカップ。

「おかわり」

何の疑いもなくこちらを見る真っ直ぐな瞳。

キラはルウに心を隠さない。隠す必要さえ感じていない。

それがどれほど稀有なことなのか、本人は少しも気づいていないのだ。

「ちょっと待ってる」

ルウは苦笑しながらカップを受け取ると、台所の奥に消えていった。

主である少女好みの一杯を淹れてやるために。

翌朝、キラが王都へ行く意思を伝えると、クロードは涙を流して喜び、感謝の言葉を述べた。

「ありがとうございます。これで殿下は…」

必ずしも治るとは限らないが、やっと希望がみえてきた。

「その前にあなたの傷を治さなけりゃ、話にならないぜ、クロードさん。あんたは道案内兼通行手形なんだから」

生憎キラもルウも正式な戸籍がない。これでは旅の時に閤所で見せる通行手形が発行されない。戸籍がないのは意外に珍しいことでもないが、王都エクリプスに入るのだから、身元の証明は必須になるだろう。

これは王の住まう場所の治安を維持するため、他の都市よりも審査が厳しく行われるためだ。

通行手形の代わりに貴族階級の者が身元を保証してくれば、閤所も通過できる。

今回の場合はクロードがこの保証人になる必要があるため、彼の同行なくしては王都へ旅立てない。

よって、しばらくの間はクロードの傷を癒やすのに費やすことになった。

幸いなことに、騎士団で鍛えられ体力があるクロードと、奇跡を起こせると巷で評判の（ということになっていろいろらしい…）医者という取り合わせである。

クロードの傷はみるみる良くなっていった。

治療後すぐはふらついてまともに歩けなかったが、半月経った今では傷が多少痛むものの、鎮痛薬なしでも動きまわれるようになっていた。

キラは自分の行った治療に対して満足していた。

実は少々医療以外のことを施していたりもしたが、ばれると面倒なことになりそうなので黙っておく。

そろそろ出発できそうだ。

朝の空気はひどく澄んでいるように感じる。肌で感じる寒さは、冬の訪れが近いことを予感させた。

キラはそんな山の空気を胸いっぱい吸い込んだ。
まだ鳥の囀りも聞こえない。誰もいない空間は、何だか山を独り
占めたような気持ちになって気分がいい。

まだ日が昇って間もない時間帯だというのに、キラが外にいるの
には理由がある。朝早く目が覚めたので、クロードの様子を見に行
ったのだが、肝心の患者のベッドが空だったのだ。

よくよく耳を澄ませると、かすかに空気を切る音が聞こえる。

家から少々離れた茂みの奥に人影がちらつく。
クロードであった。

茂みに囲まれた中にぼつかりとできた空間。
ようやく顔を出した太陽の光が差し込む森の中、美形の騎士が素
振りをしている。しかも上半身裸で。

クロードの栗色の髪は光を受けてさらに淡く透け、藍色の瞳は鋭
く前を見据えていた。滴り落ちる汗さえも輝いて見える。

まるで劇場の一場面のような光景に目を奪われない女性はかなり
少数であろう。

が、残念なことにキラは過去の経験上いろいろと目が肥えている。
クロードを見る目は医療者としてのものでしかなかった。

あとは精々、元冒険者として、剣の技量がどの程度か気になるぐ
らいか。

「調子はいいようだな」

「　　っ!？」

キラが声をかけると、クロードは驚いて振り返った。よほど集中していたようだ。

「驚かさないでください…」

「熱心なのはいいが、無理は禁物だぞ。今のその体じゃ、どうやってもまともに戦えやしない」

「わかってはいるのですが…。私には剣のない生活など考えられない。傷を癒すためとはいえ、日々体が鈍っていくのがわかるのですよ」

そうしてもたつてもいられなり、剣をもちだして素振りをしていたというわけだ。

見た目の穏やかさに反して、意外と内面は剣馬鹿だ。

「　　ティアセド流か」

「!?!?…わかるのですか？」

「まあな。あんたの剣術、ぱつと見はコナト流だけど、基礎的な部分はやっぱりティアセドだな。幼いころの師匠がティアセド流の使い手だったんだろう」

コナト流とはセージュの剣術として一般的な流派で、無駄のない動きの中にもどこか優雅さが垣間見える。一方でティアセド流は質実剛健を旨としており、相手を圧倒する力強さが印象的だ。

セージユではティアセド流はほとんど見られない。

クロードもティアセド流の師匠について習っていたのは本当に幼いころだけで、あとはコナトで通してきた。クロード自身、自分の動きは完全にコナト流であると思っていたし、騎士団で指摘されたこともなかったのだ。

それをこの短時間でキラが見切ったことにひどく驚いた。同時にキラがただの医者なだけの人間ではないことに気付いた。

その洞察に見合った技術と経験が存在しているはずなのだから。

「キラ殿も剣の嗜みが？」

訝しげに尋ねるクロードにキラは苦笑した。

医者になるのなら剣術など畑違いで習うはずもない。それでいて小柄で細身で、一合と持たずに吹き飛びそうな体躯では、とても剣を扱うようには見えなかったのだろう。

実際のところ、キラの体つきは一般女性のそれと変わらなかったが、クロードはキラの性別を誤って認識している。そのことにキラも気づいていた。この状況なら真実を告げても大丈夫そうだが、おもしろそうなのでバレるまでは黙っておくことにしていた。

「嗜みって言うほどのもんじゃない。必要だったから覚えたただけだ」

生き残り、目的を達するためには剣が必要だった。

ただそれだけを目指して剣をふるい、いつのまにかそんじょそのらの奴には負けなくなっていた。

何といつても、キラの剣の師匠はルウなのであるから。

そのスパルタな日々を思い出すだけで震えが走るため、キラは記憶を強制的に遮断した。

「これでも元冒険者だからな。剣の心得も多少はあるぞ」

ややひきつる表情を隠しきれなかったが、クロードは気付かなかったようだ。

「では、完治したらぜひ一度お手合わせ願いたい」

「いいぜ。まあ、旅の間は戦闘面での心配は無用だってことは保証するぜ」

「…もしかして」

「ああ」

明日王都に向けて出発する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0120y/>

悪魔に支払う奇跡の代価

2012年1月6日11時45分発行